

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



7月28日に開かれた「夏休み親子新聞教室」で、自分の作品を発表する親子。右は鹿野川喜代美・本社NIE企画デザイナー（よみうり大手町ホールで／4面へ）

巻頭特集 第1回 考え、議論する道德フォーラム

ワクワク授業で子どもの自覚促す 2・3

夏休み親子新聞教室 世界で一つ わたしだけの新聞 4

なつやすみ科学バスツアー 5 教員免許状更新講習 7

スウェーデン学生にことばの授業 6 読売中高生新聞でインターンシップ 8

仙台二高が笹川平和財団で研修／高校ビブリオバトル開幕 9

「ハテナソン」を文科省が視察／お知らせ・info 10 リレーエッセー 11

2016.8

Vol.20



◆パネルディスカッション
パネルディスカッションでは、合田課長、貝塚教授、鈴木校長の3氏が、教科化で正念場を迎える道徳教育の重要性や留意点について議論した。

貝塚教授は「いじめがなくならないのは、自分の問題として受け止められていないからだ」

鈴木校長は「自分で考えてみたい、自分だったらどうするか、今度はこう行動してみよう、と子どもが思うところまでもっていくダイナミックな授業」を目指すべきだと力説。「ワクワク、ドキドキできる教員でないと、ワクワク、ドキドキする授業はできないが、そのためには教師に好きなことができるゆとりが必要だ」と述べ、教師の忙しさの問題点を指摘した。

合田課長は「ヒト、モノ、カネ、時間、情報、教育内容という学校にとって大切な六つのリソースを再配置、再配分していくカリキュラムマネジメント」が重要になってくると強調。「マネジメントはこれまで管理職や

道徳教育の主演・脚本は教師の役割

評価は子どもの内面の変化を見るものなので、入試には活用しない、との結論を得た。教科

化を機に大人が真正面から子どもと向き合おうという機運が高まってきた。

2018年度から特別教科に

2018年度から小中学校で段階的に道徳が特別教科とされるのを前に、道徳教育の重要性について話し合う「第1回 考え、議論する道徳フォーラム」（読売新聞東京本社主催、文部科学省委託事業）が7月27日、東京都千代田区のよみうり大手町ホールで開かれ、教育関係者ら約400人が参加した。特別教科化に向けて評価方法を検討してきた文科省の専門家会議が22日に報告書をまとめた直後のタイミング。同省の合田哲雄・初等中等教育局教育課程課長が「未来社会と『考え、議論する道徳』」と題して基調講演した後、合田課長と貝塚茂樹・武蔵野大教授、鈴木明雄・東京都北区立飛鳥中学校長がパネルディスカッションで意見を交換。さらに、小中学校教諭らが五つの分科会に分かれて模擬授業などを行った後、ロバート キャンベル東大教授が特別記念講演で「自ら考え、学ぶことの喜び」について語った。（コーディネーターは読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の松本美奈・専門委員が務めた）



パネルディスカッションに臨む(右から)合田哲雄、鈴木明雄、貝塚茂樹の各氏。左端はコーディネーターの松本美奈専門委員

ワクワク授業で子どもの自覚促す

子どもと向き合う機運高まる



◆基調講演

道徳の教科化が小学校で2018年度、中学校で19年度に実施される。20年度から始まる学習指導要領の基本的考え方の先取りだ。10年に一度の全面改定で人工知能（AI）時代の到来を見据え、人でなければできないことは何かということに突き詰めていく。

AIは与えられた目的はうまく処理する。しかし、目的が正しいかは判断できない。複雑な状況下で目的を組み替えたり、とらえ直したりすることは人間の最大の強みだ。このことを学校教育の中でしっかり受け止めてきた道徳的な自覚や我々が子ども



合田哲雄氏
(文科省初等中等教育局教育課程課長)

もどう向き合うかという問いに他ならない。

子どもは数学や理科を何のために学ぶのかを必ずしも得心していない。理科では「生命を尊重する態度や、根拠に基づき判断する態度、失敗してもくじけず挑戦する態度が大事だ」と教える。これは道徳的な自覚をどう深めるかと深く関わる。

道徳の教科化の目的は量的確保と質的転換の二つ。道徳の時間が体育祭の準備などに流用され、確保されていないのが現状だ。年間35時間の授業が確実に実施されることが大前提だ。道徳的価値とどう向き合うかという点で、質的転換も重要だ。多面的、多角的に道徳的な価値を考え、他人事ではなく自分の問題としてどう考え、自覚するかポイントだ。

問題解決的な学習や道徳的行為の体験的学習など授業での質の高いカードを増やすことが大事。各教科の学びに向かう力、人間性と道徳をつなぐカリキュラムマネジメントも重要だ。

◆参加者コメント

参加した岐阜県笠松町立笠松小の大蔵純子教諭は「これから社会をどう生きていくか。道徳教育の質的転換は一人ひとりが考えていかなければいけないということがよく分かった」と話した。また、東京都大田区立志茂田中の畑佐直紀教諭は「講演やパネルディスカッションのほか分科会では事例発表があり、こういうふうに授業を深め

分科会のテーマ

- ① 考えたくなる
- ② 「問い」を創る
- ③ いじめに向き合う
- ④ 多面的・多角的に考え、議論する
- ⑤ 多様な教材で考え、議論する
- ⑥ 現代的な課題に

ていけばいいのかと理解できたと納得した様子だった。

特別記念講演

自ら考えることの喜びを感じられる場に

ロバート キャンベル氏(東大教授)



東大生は、聞かれたことには速やかに的確に回答するが、聞かれたことの意味を考え、それを伝えることが苦手な学生もいる。正しい答えを出すだけでなく、答えの裏にある背景を俯瞰（ふかん）的に見る能力を育てるためには道徳が重要になってくる。

東大に今年入学した学生を対象にした演習では橘曙覧（たちばなのあけみ）という幕末の歌人の歌を編集した「独楽吟（どくらぎん）」を使った。これは、どの歌も「たのしみは」で始まり「～とき」で終わる一連の歌をまとめたものだ。

例えば「たのしみはあき米櫃（こめびつ）に米いでき 今一月（ひとつき）はよし」とき」という橘曙覧の歌。一月はこれでよしだ、と

詠んだ人の状況はどうか、学生に聞くとなかなか言葉が出てこない。知識を身につけることは大切だが、その先にある世界を想像するのにこういう素材を使って練習することはできる。

ほかにも、上田秋成の雨月物語の「菊花（きくか）の約（ちぎり）六尺」などの素材を使ってもいい。

日本の歌を英語にしてみても、（主語のない）日本語の特徴、魅力、表現の変化を学ぶこともできるだろう。英語や国語ではなく道徳の授業でできるかもしれない。

解釈、答え、意味だけでなく、自ら考え、学ぶことの喜びを感じられる場になれば、と思っている。

考え、議論する道徳

世界に一つわたしの新聞

新聞を切り貼りして自分だけのスクラップ作品を作る「夏休み親子新聞教室」が7月28日と8月20日の2回にわたり、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれた。

読売新聞社が2008年から主催している毎夏恒例のイベント。夏休みの自由研究に役立つこともあり、例年定員の2倍を超える応募が寄せら

れる。今年はより多くの親子に参加してもらおうと、開催回数を増やした。

7月28日の新聞教室には、68組約170人の親子らが参加。1都5県の小1から中2までの子どもたちが、作品作りに取り組んだ。

最初に鹿野川喜代美・本社NIE企画デザイナーが、新聞を楽しく読み、スクラップ

を作るコツを解説。「18歳から選挙権を持つようになり、人とうる関わり、どう生きていくかを考えられる頭を、子どもの頃から育てていくことが求められている。新聞を読んで『なぜ? どうして?』と常に考える習慣をつけ、自分の意見を持つことが大切だ」と強調した。

続いて、杉山美佳・川崎市

新聞作りに取り組む参加者たち

新聞作りのコツを話す鹿野川喜代美・本社NIE企画デザイナー

「夏休み親子新聞教室」7、8月に本社で開催

立栗木台小教諭、田村香代子・東京都杉並区立高井戸小教諭、島貫勝義・東京都北区立堀船中教諭が、日頃取り組んでいる新聞を活用した授業や、児童生徒の作品を紹介した。説明を聞いた子どもたちは早速、読売新聞や読売KODOMO新聞、別刷りのNIE特集「わくわく新聞活用」をめくり、スクラップする記事を選び始めた。

五輪やスマホゲームなどテーマにスクラップ

子どもたちがテーマに取り上げたのは、リオ五輪や米大リーグ・イチロー選手の日米通算安打記録、スマホゲーム、熱中症、日本人宇宙飛行士など様々。気になる記事や写真、広告を切り抜き、レイアウトを工夫しながら専用の用紙に貼っていく。その後、マジックや蛍光ペンで注目した箇所に色をつけ、タイトルとなる新たな見出しをつけた。感想や意見を書き込んだりして、個性豊かな作品に仕上げていった。

子どもたちが作品作りに取り組ん

でいる間、鹿野川NIE企画デザイナーと3教諭が会場内を回り、「用紙に貼りきれないと思ったら、見出しだけ貼ってもOK」「絵を書き加えてもいいよ」などとアドバイスをした。その後、8組の親子が壇上に上がり、それぞれの作品を紹介。親子が力を合わせて仕上げた力作に、会場から大きな拍手が送られた。

参加した子どもからは「気になった記事を探して切り貼りするの楽しかった」「今度は別のテーマで作りたい」などの声があがった。一方、親からは「子どもの興味関心が分かって、有意義な時間だった」「子どもがいろいろと考えることが分かった」などの感想が聞かれた。

最後に鹿野川NIE企画デザイナーが「新聞を読むと、たくさんさんの喜怒哀楽と出会うことができ、その積み重ねが、豊かな人生を生きることにつながる」と話し、教室を締めくくった。

8月20日の新聞教室には、26組66人の親子が参加した。

(7月28日の「夏休み親子新聞教室」の詳細は8月18日付の本紙朝刊に掲載されました)



科学にふれるバスツアー 開催

JXエネルギー製油所と日本科学未来館を見学



日本の
エネルギーを
支えているのは
ここだ!



JXエネルギー根岸製油所の
大型化学高所放水車の説明
を受ける参加者たち

「第12回なつやすみ科学バスツアー」（主催：読売新聞東京本社、共催：JXエネルギー）が8月2日、行なわれた。39組78人の小学生4～6年生と保護者が日頃見ることができない製油所を見学したり、石油製品がどのようにしてできるのかを実験を通して学んだりした。ツアーでは、読売教育ネットワークに参加しているJXエネルギー（ENEOS）の根岸製油所（横浜市磯子区）と日本科学未来館（東京都江東区）を回った。本紙などで募集したところ、約700組の応募があった。

参加児童らはこの日午前8時に東京・大手町の読売新聞東京本社に集合し、バス2台に分乗して根岸製油所に向かった。同製油所は、周囲約12キロ、220万平方メートルという広大な土地に展開している。

製油所に着くと、同製油所総務グループの加藤照行マネジャーが「今朝は大雨だったのですが、うなることかと思いましたが、皆さんを無事お迎えできて良かったです」とあいさつ。さっそく映像を見ながら社員による解説が始まった。日本では発電や車の動力源、石油製品の原料などとして利用され、世界3位の石油消費国でありながら、原油の約80%を中東からの輸入に頼っている。

石油製品の製法、 実験で学ぶ

この後、原油をガソリンや軽油、重油などの石油製品に分ける原理の実験を行った。ガソリンや軽油、重油はそれぞれ沸点が違うため、原油を熱して温度別に蒸発した気体を冷やして液体に戻せば分離できる。実験では、水とグリセリンを混ぜた茶色の液体をフラスコで熱し、100度で気体になる水だけがフラスコから伸びたガラス管を通って透明な液体としてビーカーに戻される様子を観察した。

最後に地球温暖化についての話を聞いた。石油など化石燃料を使い続けると二酸化炭素の濃度が高くなり地球の表面温度が上昇するため、環境にやさしいバイオガソリンや燃料電池などのクリーンエネルギーの開発・供給に取り組んでいると説明を受けた。

製油所見学では、再びバスに乗って広大な敷地を回った。原油を石油製品のもととなる成分



JXエネルギー根岸製油所で原油の蒸留原理の実験を食い入るように見つめる児童たち

に分ける常圧蒸留装置や300基の貯蔵タンクのほか、出来上がった製品を出荷するためのタンカー専用の棧橋、貨物列車やタンクローリーの出荷場など巨大な施設に児童は目を輝かせた。また、安全対策のために7台配備されている消防車による高所放水の実演も行われた。

児童らは昼食後、日本科学未来館に移動。ロボットのアシモ君や、インターネットの原理をボールを使って目で見える形で説明した体験型の展示など最先端の科学に触れた。

東京都大田区から参加した小学4年の崎田彰人君（9）は「石油製品が温度の違いでできる様子が分かった。製油所の貯蔵タンクが大きいので驚いた」と感想を話していた。



(左)千葉大職員(左端)を相手に模擬取材をするルンド大の学生たち (下)模擬取材の成果を披露するルンド大の学生たち



スウェーデンの大学生に「ことばの授業」

日本語でインタビューに挑戦

スウェーデンの名門ルンド大学で日本語を学ぶ学生16人が7月22日、千葉大学の国際教育センター(千葉市)で、読売新聞記者と大学生のペアによる出前授業「ことばの授業」を受け、日本語による模擬インタビューに挑戦した。

「ことばの授業」は同大学教育学部の藤川大祐教授が理事長を務めるNPO法人「企業教育研究会」と読売新聞が共同で開発した2時間のプログラム。本来は主に小中学生を対象としたものだが、日本語を外国語として学ぶ海外からの留学生にも応用できるのではないかと、出前授業の依頼があり、初の試みが実現した。

ルンド大生は6月6日から8週間に及ぶ千葉大学でのサマープログラムに参加、日本語学習に集中的に取り組む、聞き取りや会話、作文のスキルなどを磨いてきた。日本語によるインタビューは最終目標の一つ。

この日は、読売新聞教育ネットワーク事務局の保井隆之記者と千葉大教育学部4年の上村冬実さんが講師を務め、「ことばの授業」のプログラムの一つ「インタビューをしよう」を行った。

最初に新聞制作に関する短いビデオで聞き取り能力を確認した後、保井記者が「取材メモを取る際には、大切なことだけを記号などを使いながら素早く書く」と説明。サマープログラム担当の佐藤尚子・国際教養学部准教授を相手にインタビューのお手本を見せ、興味深い話題を引き出すコツなどを披露した。

学生らはその後、4人ずつ4つの班に分かれ、大学関係者を相手に模擬インタビューを行い、取材成果を模造紙に書き込んで発表した。授業に参加したビクタ・ノビスさん(21)は「本物の記者から取材の仕方を教えてもらい、勉強になった。分かりやすかった」と笑顔で話していた。



本社教育部長 並木中等教育学校で講演

課題探究の大切さを強調

茨城県立並木中等教育学校(つくば市)で7月25日に開かれた夏季講座に、読売新聞東京本社の古沢由紀子教育部長が講師として招かれ、自ら課題を見つけて探究する力を養うことの大切さや、大学入試改革などをテーマに講演した。写真。

同校では生徒がそれぞれ好きなテーマを掘り下げて探究し、論文にまとめる「課題探究」を取り入れており、そのヒントを得る機会として外部から講師を招いている。今回は高1と高2にあたる4年生と5年生の約300人が参加した。

古沢部長は、2001年の米同時テロや、教育改革の現場など、様々な取材経験に触れながら、課題探究を通して身に付く力が将来、社会で求められることや、大学入試も思考力や表現力、判断力を重視する方向になりつつあることなどを紹介した。

担当の二宮かおる教諭は「国際社会に興味のある生徒には、特に役に立つ内容だった。生徒たちは実践に生かしてほしい」と話していた。

読売新聞の出前授業・講師派遣



(上)「まわしよみ新聞」を作る教員たち (下)できあがった「まわしよみ新聞」を紹介

教員の免許状更新講習で新聞活用

記事執筆や「まわしよみ新聞」作り

玉川大学が開講する教員免許状更新講習「新聞で育む『言語力・人間力』」が8月8、9の両日、読売新聞東京本社（東京・大手町）と玉川大学（東京都町田市）を会場に行われ、全国の小中高校の教員31人が参加した。

この講習は読売新聞東京本社が請け負い、鹿野川喜代美・同社NIE企画デザイナー（玉川大学教師教育リサーチセンター非常勤講師）を全講習の進行役に、読売新聞記者らを講師に実施された。

教員は10年ごとに30時間以上の教員免許状更新講習の受講が必要。同大学は「必修」「選択必修」「選択」の3領域で23の対面授業型更新講習を開講し

ている。読売新聞社による講習は「選択」領域の一つで、昨年に引き続き2回目の実施となった。児童生徒に社会とのつながりを自覚させ、問題意識を持つて生きていく力を身に付けさせるため、新聞についての理解を深め、授業での活用方法を学んでもらうのが狙いだ。

初日は、生活部の吉田尚大記者と文化部の鶴飼哲夫編集委員がそれぞれ、貧困児童などの問題と文学賞の舞台裏について講義を行った。読売新聞東京本社の編集局などの見学も行われた。

この日最後には、1日の出来事を記事にする時間が設けられ、参加者は記者の指導を受けながら、熱心に取り組んだ。

2日目はグループワークが中心。実際の記事・写真を見て適切な見出しを付けたり、参加者が互いにインタビューし合ったりにして、取材や編集の一端を経験した。

「早速、授業に取り入れたい」

全国的な広がりを見せている「まわしよみ新聞」作りも行われた。参加者は八つのグループに分かれ、当日の朝刊からそれ



取材した人物をひと言で表すグループワークも行われた

ぞれが面白いと思った記事を複数選択。グループ内で話し合いながら、独自の見出しやイラストを付け、自由なレイアウトで1枚の壁新聞にまとめ上げた。

また、1999年の新聞協会賞（編集部門）を受賞したカメラマンの秋元和夫記者が、5月のオバマ米大統領の広島訪問を取り上げ、新聞各紙の記事を読み比べたり、当日の写真記者たちの撮影ポジションを解説したりしながら、報道現場の最前線を紹介した。

参加者からは「身近にある新聞が、こんなにも熱い教材に変身するのかと驚いた」「習得した新聞活用方法を早速、授業に取り入れたい」といった声が上ががり、充実した講習に満足した様子だった。

読売中高生新聞でインターンシップ 立川国際中等教育学校の生徒が記者を体験



中高生新聞の記者(左)とともに各紙朝刊をチェックする立川国際中等教育学校の生徒たち

東京都立立川国際中等教育学校(立川市)の4年生(高1)3人が7月下旬、読売中高生新聞編集部で特別にインターンシップを行った。

参加したのは、秋山夏海さん、公塚優奈さん、菅野穂香さん。21、22、27日の3日間で、読売新聞朝刊1面のコラム「編集手帳」をお手本にした「練習手帳」の執筆や、企画会議での提案、英会話ペー

ジの校閲、高校野球の取材など、盛りだくさんのプログラムを体験した。

2日目の企画会議では、中高生新聞「季節外れの期末テスト」コーナーの設問を考え、課題が与えられた。担当の藤山純久記者から、①簡単すぎない②解いたときに、「へー」がある——とコツを伝授され、7月15日号と22日号の記事の中から設問を考え、3人は、何度も新聞をめくったり、電子辞書を引いたりしながら、熱心に取り組んでいた。

その結果、アスリート長者番付の記事から、「最も稼いだのは誰か」「最も収入が多いロナルド選手はいくら稼いだか」といった問題ができあがった。藤山記者は「人を問うか、金額を問うかどちらかに分かれるけれど、ストリートに人の興味を引くところに気づいたのはすごい」と評価。また、体操の白井健三選手の得意技を問う設問では、「ひねり」のほか「り」で終

わる単語を選択肢に選んだ点に注目し、「言葉で遊んでいて、面白い発想。よくできている」と絶賛した。3人は「自分の興味があることは作りにやすかった」「解いたときに、ああ分かったと思える問題を考えた」などと振り返っていた。

高校野球地区予選を取材

最終日の27日は、高校野球の西東京大会決勝の日。高校野球の取材経験が豊富な松本英一郎記者とともに会場の神宮球場へ向かった。記者室で、八王子高校側と東海大菅生高校側のスタンドのどちらで取材するかを相談。3年連続の挑戦となる東海大菅生のスタンドで取材することになった。

記者と同じメモ帳を渡された3人は、緊張した面持ちで一塁側スタンドへ。松本記者から、「観客席を見たときに、何が見えるか。現場に行かないと分からないことを探すのが大切」とアドバイスを受け、

客席を見回していた。

序盤から点を取られ重苦しい雰囲気。八王子高の攻撃の回には、応援に來ている吹奏楽部の関係者に取材する松本記者について行き、メモを取りながら見学した。

試合後は、負けた東海大菅生の監督や投手のインタビュー取材に立ち会った。3人は、涙を流したり、うつむいて座ったりしている選手を目にし、戸惑いながらも、記者室に戻り、当日の様子を原稿用紙にまとめた。

インターンシップを終え、菅野さんは「新聞社の仕事は全く想像でしなかったけど、とても忙しいと感じた。決勝の試合を初めて見て、多くの人を感動させる一生懸命な姿



東海大菅生高校吹奏楽部の関係者(右端)に話を聞く立川国際中等教育学校の生徒たち(左の3人)

に驚いたし、その姿を伝える報道はすごいと思った」と話していた。秋山さんは「雑感記事を初めて書いたけど、楽しかった。練習手帳を書いて、記者に文章を見てもらえたのが、いい経験になった」。公塚さんは「中高生新聞についての意見を言ったり、アイデアを出したりしたのが楽しかった」と満足そうだった。

仙台二高1年生が笹川平和財団で研修

企業トップ経験者や研究者らと対話 国際関係の仕事に興味津々



ディレクトフォース会員で旧三菱銀行OBの吉田文一さん(中央)から熱心に話を聞く仙台二高の生徒たち

宮城県仙台第二高校(長島勝彦校長)の1年生159人が8月3日、夏季研修プログラムの一環として、東京・虎ノ門にある笹川平和財団を訪れ、グローバルに活躍する企業のトップ経験者や研究者らから仕事の話を聞き、自らの将来について考えた。読売教育ネットワークに参加している一般社団法人ディレクトフォースの協力で実現した。

冒頭で、国際エネルギー機

関(IEA)事務局長を務めた同財団の田中伸男理事長が、国際機関で働いた経験や世界のエネルギー事情などについて講演。大学時代に国際学生団体に所属したことが、国際機関を目指すきっかけになったと話し、国際機関を目指すステップとして「まず高校や大学などで、国際的な活動をしてみてはどうか」とアドバイスした。

生徒は26の班に分かれて、

同財団や日本財団で活躍する研究員のほか、ディレクトフォース会員の企業OBら、計30人からそれぞれの仕事の内容などを聞いた。生徒たちは、国際協力の仕事に携わってきた研究員からテロに関する話を聞き、原因や対策について考えたり、事前に用意した質問をしたりして、熱心にメモを取っていた。

酒井龍聖さんは、ブラジル駐在が長く、三井アリメントス社長などを歴任した安達公一さんから、現地で仕事をする上で必要なことや人材育成の秘訣などを聞いた話が印象に残っているという。「社長を務めた人と話すことはないので、いろいろ聞けてためになった。国際関係の道に進んでいきたいと強く感じた」と話していた。

また、井上恵さんは「海外で活動している人が多く、もっと広い視野を持つべきだと思った。皆さん、自分の中に何かを持っているような気がした。自分も早くそうしたものを身につけて生きていければと思った」と気持ちを新たにしていた。

7月23日に 四国と神奈川で火ぶた

高校生のお薦め本ナンバーワンを決定する「全国高等学校ビブリオバトル2016」が開幕し、7月23日に全国のトップを切って松山市と横浜市で大会が行われた。

松山市の松山東雲女子大学で行われた四国大会(活字文化推進会議主催)には、四国4県から18校の代表が出場。お気に入りのファンタジー小説の魅力を熱く語った徳島県立池田高校2年の関口俊介さん(16)が優勝し、来年1月に東京・よみうり大手町ホールで行われる決勝大会への出場権を得た。



(右)四国大会で優勝した関口俊介さん
(左)「うそつき、うそつき」で決勝にコマを進めた前島千手さん

関口さんは、戦争の危機が迫る架空の世界を舞台に、図書館のあるじを務める少女の活躍を描く「図書館の魔女」(高田大介著)を紹介。「上下巻1457ページ。見た目通り中身も重く、がっつり読み応えがある。最初から最後まで僕の知的好奇心をくすぐり続けた」などと魅力を訴えかけた。

一方、横浜市の神奈川近代文学館で開かれた神奈川県大会(県高等学校文化連盟主催、活字文化推進会議など共催)には県内の高校生18人が出場。県立平塚中等教育学校4年(高1)の前島千手さん(15)が優勝し、決勝大会へコマを進めた。前島さんは、国民管理のために首輪型うそ発見器の着用品が義務づけられた世界を描いた「うそつき、うそつき」(清水杜氏彦著)を紹介。「正義、生きることに、幸せ、大切な何かについて、皆さんは考えてしまおうと思う。読んで確認してみよう」と語りかけ、聴衆の心をつかんだ。

全国高校ビブリオバトル開幕

文科省の専門官らがハテナソン視察



学生に交じってハテナソンに参加する文科省の大岸専門職(右から2人目)。中央奥は松本専門委員

【ハテナソン】

hatenathon

疑問を表す「はてな」と「マラソン」を組み合わせた造語。佐藤賢一・京都産業大学教授がD・ロスステイン著『たった一つを変えるだけ』(新評論)をヒントに命名、新聞を活用したアクティブ・ラーニングとして開発した教育プログラム。

教職員研修見直しに向け

自ら問い、自ら考えるグループワークとして教育現場で広がっている「ハテナソン」を7月13日、文部科学省の専門官らが視察、学生に交じって質問作りワークショップを体験した。

この授業は、帝京大学(東京都八王子市)の土持ゲリー法一教授と本社が共同で行う一般教養講座で、視察したのは文科省初等中等教育局教職員課の伊野哲也専門官と大岸正樹専門職の2人。

この日が参院選の直後だったこともあり、講師を務める松本美奈・本社教育ネットワーク事務局専門委員が、約50人の学生に「18歳選挙権は日本を変える」というテーマを提示。伊野、大岸両氏も学生と同じテーブルについて、「18歳と19歳の投票率に差が出たのはなぜ?」「自宅から遠い大学に通っている学生も投票しやすくするにはどうしたらいいか?」など、ホワイトボードに次々と質問や疑問点を書き出した。

文科省では小、中学校の学習指導要領にアクティブ・ラーニングを盛り込むために教職員研修の見直しを進めており、この日の視察もその一環。伊野専門官は「現場の先生たちがアクティブ・ラーニングを体験していないので実践するのが難しい。ハテナソンのような手法は研修に生かせる」。大岸専門職は「この講義が一番授業を受けている感じがする」と学生が語っていたのが印象的。こういう授業が当たり前になれば学校現場も変わるのではないかと感想を話していた。

「中学受験ガイド2017」発売中

中学入試の最新情報を伝える読売新聞社のムック本「中学受験ガイド2017」(読売新聞教育ネットワーク事務局編)＝写真＝が発売中です。

全国342の中高一貫校の「大学合格実績」のほか、独自調査による「主要塾の合格者数一覧」を紹介。関東や関西の有力校の校長らのインタビュー記事なども掲載しています。

また、生徒が課題研究やグループ討論を行う「アクティブ・ラーニング」、グローバル化に対応した英語教育などの現状も取り上げました。思考力や表現力を重視した大学入試改革をにらみ、進路選択の参考になる情報が満載されています。

A4変型、税別1148円。書店のほか、最寄りの読売新聞販売店(YC)で購入できます。



ジャパン・ニュースが高校生翻訳コンテスト開催

読売新聞が発行する日刊英字紙The Japan Newsでは、高校生を対象とした「和英翻訳コンテスト高校生特集」を実施しています。日本語の新聞記事を英訳してみませんか。もちろん辞書を使ってもOKです。締め切りは9月7日(水)。審査結果は、9月25日(日)のThe Japan Newsの紙面で、講評とともに発表します。

<応募方法>

■e-mail…9月7日午後6時までに、メール件名を「高校生特集」と明記の上、翻訳文をメール本文として送信。

送信先 jn-edu@yomiuri.com

■郵送…9月7日必着。封書かハガキ(鉛筆書きは不可)で。

宛先 〒100-8055(住所不要)

読売新聞東京本社 英字新聞部「高校生特集」係

<賞品>

最優秀作品に3000円、優秀作品に2000円、佳作に1000円分の図書カードを贈呈します。

※課題文など詳細は、The Japan Newsのウェブサイトをご覧ください。

<http://the-japan-news.com/news/article/0003052118>

News



大学の友人と。松崎さん(前列中央)=本人提供

海外で学ぶ・リレーエッセー ②〇 英ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL) 「熱心に学ぶイギリスの大学生」

神戸女学院高等学校卒業、英ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン1年

松崎 可鈴さん



ロンドンに来て約半年、新旧が混在するこの街に感嘆させられてきたように思う。ロンドンの道という道に息づく歴史の足跡に常に古いものの息吹を感じつつ、大都市の中心地で常に人間の活動とともに変容を続ける社会の存在を意識させられた。

あるセミナーでは、世代間で捉え方の違う「集合的記憶」の、象徴的な例となる母国の歴史的事象をあげて議論がなされた。私が靖国神社の例を交えて話すと、他の学生が異なる歴史理解を前提とした反論をしてくれた。その瞬間、私は全体の33%が留学生であるこの大学の、多様性のある環境を享受できることに感謝した。

私は日本の普通の高校を卒業したため、UCLの大学進学準備コースで人文地理学と経済学を学んでいる。このコースは、16歳から専門分野を学ぶ英国の教育システムに留学生を適応させるのが目的だ。UCLを選択したのは、文理学士号(BASc = Arts and Sciences)を選ぶ

学位が提供されること、国際都市のど真ん中という立地、そして教授対学生の割合が1:10であるという理由からだ。UCLのBachelor in Arts and Sciencesコースの学生は芸術・人文と科学の双方の分野を履修できる。例えば、私は政治学(人文系)を主専攻に、心理学(理系)を副専攻に選び、それぞれの学問のみを専攻とする学生と同じ授業を取ることができる。

私はイギリスの大学の雰囲気が好きだ。人文系と理系がともに尊重されている、と強く感じるからだ。誰も、文学や歴史、あるいは哲学を学ぶことへの実利的な意義を問わない。そこが好きだ。24時間開放されているお気に入りの図書館には、学ぶことに貪欲な学生の姿がある。公開講義に行ってみるのも楽しい。教授や政治家、主要人物が登壇するだけではなく、大学の学生団体が開催するものもある。

ある回は、大学のイスラム学生団体(Islamic Society)が当事者である難民認定待ちのシリア人と、彼らを支援するNGOの代表を招き、共通の認識を持つとうとするものだった。紛争解決を志す人間として、こうした場所で学びを深められる環境にきたありがたみを実感する日々だ。海外留学は予期せぬ出来事が待ち受けているかも知れず、リスクもあるかもしれないが、私はあえて、それなりの価値があると言いたい。

(会報編集部抄訳「The Japan News 2016年2月26日」)



英ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL)

1826年創立。150か国からの留学生を受け入れており、学生の3分の1を占めている。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。

英語の原文は <http://the-japan-news.com/news/article/000266165> でお読みいただけます。